



「忠臣蔵三百年」48番目の義士 菅野三平重實⑨

自刃(2)

元禄14(1701)年12月21日菅野三平は、三島郡山田村(現在の吹田市山田)に嫁いだ妹「おつや」のもとへ、一通の手紙を送りました。手紙の一節には、「わたくし事もさがりがたき用の事御さ候てふしみへまかり出申候」とあります。この意味は、「避けることができないう事があるの、伏見へ行くことになった」と伝える内容ですが、三平が伏見へ行く目的とは、一体何だったのでしょうか。

この年の9月に大石内蔵助は、仇討ちの急進派の説得、浅野家復興、吉良上野介への処分などを訴えるため江戸へ向かい、さまざまな行動を展開するとともに、11月14日には東京・浅草の泉岳寺にある亡き主君浅野内匠頭長矩の墓へ参拝し、12月

5日に伏見へ戻ってきました。

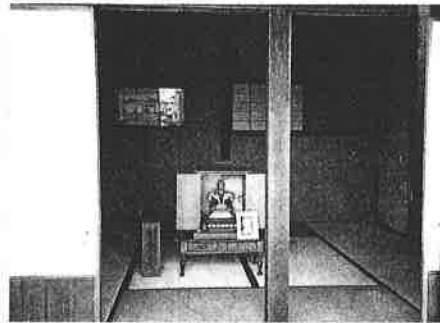
この江戸行きが主君の仇討ちを決定するきっかけになったように、12月9日には江戸から伏見へ来ていた潮田又之丞と中村勘助が仇討ちの「連判」を行ったのに続き、翌年の1月中旬ごろまでに、多くの赤穂浪士が連判のため伏見へ赴いてきました。

したがって、三平が「おつや」にあてた手紙に記された伏見行きの目的は、仇討ちの連判のために行く必要があったことがわかりますが、堀部安兵衛が書き記した「堀部武庸筆記」に名前を残す50人のなかに「菅野三平」の名は見あたりませんので、三平は伏見へ一度も行くことはなかったのです。

父重利が仇討ちのために江戸へ行くことを反対したため、三平は「忠孝」の板挟みになり苦悩して自ら死を選んだと言われているか否かについて悩んだ結果の自刃である、と推測されます。連判に対する父の反対もあったでしょうが、もし連判に名を連ねた後に仇討ちに加わらなかつた場合には、いかなる理由があったにせよ、赤穂浪士の同士をだました裏切り者になってしまっています。

三平が自ら命を絶つたのは、連判の期日がぎりぎりまで迫っていた時期ですので、「おつや」に手紙を出してから僅か3週間

の間に、三平の決心は「討ち入り」から「自刃」へと変心していききました。この間の三平の苦しい心の中は、計り知れない悲しいものがあります。



▲三平が自刃した部屋と木像

自刃する前日の物語として伝えられている逸話に、次のような話もあります。元禄15年1月13日、三平は、新稲の吉田四郎兵衛に嫁いでいる姉「小きん」を訪ねました。姉のもとで過ごした後に別れを告げた三平ですが、見送る姉は、その様子から何かを感じたらしく、弟を見送るその眼は涙でぬれていたと伝えられています。

1月14日の未明に、三平は、赤穂から帰郷後に居室としていた長屋門の一室で、27歳の短い人生に自ら終止符をうちました。亡骸となった三平の傍らには、次のように書かれた辞世の句が残されています。

晴れゆくや 日(ひ)え心の

花巻り

清泉